

脳血管疾患の患者と自宅での介護という課題に再挑戦する家族の力を引き出す看護

原口有紀(応用看護学)

【キーワード】 脳血管疾患再発作患者、介護の重度化、家族の力を引き出す看護、自宅での介護、回復期リハビリテーション病棟

目的は、自宅での介護という課題に再挑戦する家族が、脳血管疾患の患者にとって、回復過程を促進する関わりができるように、また、自宅での重度化した介護と向きあえるように、患者と家族の力を引き出す看護の指針を導き出すことである。対象は、脳血管疾患再発作患者と自宅での介護に再挑戦する家族との自宅退院までの看護過程である。

方法は、看護師の関わりにより、自宅での介護ができる方向に向かって、患者と家族の力が引き出されたと思われる選定した13場面を、プロセスレコードに再構成し研究素材とした。

研究素材から「看護場面の特徴」、「看護師は患者と家族の何を見てどう思いどう行動したか」、「患者の力<引き出された患者の力>」、「家族の力<引き出された患者の力>」、「場面の意味」を持つ分析フォーマットに、それぞれ取り出した。

場面の意味から、患者の回復過程にそって看護師の関わり方の性質の違いで、7段階に分けられた。次に、取り出した「看護師は患者と家族の何を見てどう思いどう行動したか」、「患者の力<引き出された患者の力>」、「家族の力<引き出された患者の力>」の特徴を類別し共通性を取り出した。以上の分析により、以下の看護の指針を導き出した。

<患者と家族の力を見極める段階>

- 1 患者と家族に関わる時は、常に、患者と家族はこれまでの介護生活の中で力を持っている存在だととらえ、患者と家族との関わりを観察したり、これまでの介護生活を振り返ることで、患者と家族の力を見極める。

- 2 家族が自宅での介護に再挑戦できるか見極めるには、これまで介護生活や生活過程の中で培われてきた力を確認するとともに、家族が患者の不自由な部分だけでなく、患者の力に目を向けることができるよう関わる。
- 3 家族が新しい技に挑戦する時には、家族の思いや技を確認しながら、患者にとって必要な技のポイントを、家族が患者の身体内部構造を描く力が強化できるよう伝えたとともに、患者にとっての家族の行為を意味づける。

<患者と主介護者以外の力を見極める段階>

- 4 患者と主介護者を支える力を見極めるには、主介護者以外の家族が、これまでどのような思いで、どのように介護に参加してきたのかさぐり、その過程で患者にとっての家族がどんな存在であるかを見極める。

<患者に必要な技術の確認と習得への支援の段階>

- 5 家族が患者の状態の判断に困っている時には、適切な人に尋ねることができるよう、患者の状態を描きながら家族の意向をくんでケアを判断し、困りごとが解決できるように提案する。
- 6 必要な技術の確認と習得を支援する時は、家族が患者に確認しながら技を実施でき、患者におこったよい変化に注目できるよう機会をつくって見守り、看護師の行為の根拠を伝える。

<自宅でおこりえる状況と対処方法を家族が獲得することを支援する段階>

- 7 家族が自宅でも患者の力が発揮できる働きかけができるように、以前の自宅での介護状況を具体的に確認し、家族が患者の立場でこれからの生活を描け、家族それぞれの力が発揮できる家族なりの介護方針が描けるよう整える。

<患者の力を発揮できる自宅介護の方向性を描く段階>

- 8 患者の力を発揮できる自宅介護の方向性を描く時には、患者の立場で生きることの意味や健康とはと考え、家族の患者への関わりを評価し、家族に看護師が描いた患者への関わりの方向性を伝え、家族と患者と目標を共有する。

<自宅介護の意味を共有する段階>

- 9 自宅退院への患者と家族に思いの強さを、これまでの介護生活を重ねながら確認し、患者と家族にとっての自宅退院の意味を共有した上で、家族が患者の位置で自宅介護を望めるよう支援する。

<退院に向かって社会資源を家族が選択することを支援する段階>

- 10 自宅生活を支える社会資源をとらえながら、家族が患者にとって必要な資源を適切に選択できるか判断し、家族が患者の回復を促進するために何に頼ればよいか必要なものを描けるよう関わる。